

私の夢は、すべての子どもたちの社会的自立が可能になる環境を作ることだ。

私がこの夢を持ったのは、特別支援学級の生徒との交流をしたことがきっかけだ。私の通っていた小・中学校は、普通学級と特別支援学級が共にある統合教育を行っている。特別支援学級の生徒たちと同じ学校で過ごし、交流を行うことが自然な環境であったため、障がい者への偏見を持つことはなく、むしろ身近に感じる事ができた。しかし、高校に上がると、特別支援学級がない環境に変わった。障がい者が身近に居ない高校生活を過ごして思ったことは、障がい者に一切関わることのない人が、障がい者を理解し、合理的配慮に努めるのは難しいということだ。

日本は、他の福祉先進国よりも、障がい者に対する差別意識が高い。確かに日本でも平成二十五年に障害者差別解消法が公布され、合理的配慮という考えが広まった。しかし、あくまでも差別意識の解消を目指すということにとどまるもので、罰則が規定されているわけではない。それに対し、欧米の福祉先進国は、障害者差別禁止法を制定し、明確な罰則規定を設けている。

日本人の障がい者への差別意識が高い背景には、健常者と障がい者を分離し、障がい者を一つの施設に隔離したということがある。それが障がい者という偏見を強くしたと考えられる。障がい者への理解が深いデンマークでは、ノーマライゼーションの下に、福祉国家が発展していった。日本もデンマークのように健常者と障がい者が平等にコミュニケーションを取れるような共生社会を目指すことによって、障がい者への差別をなくしていくのではないだろうか。

私は将来スクールソーシャルワーカーを目指している。不登校や児童虐待、いじめといった問題は、個性や多様性を欠如・異常として考え、受け入れようとしにくい考え方から発生する。これは、障がい者を差別する考えと同じだ。すべての人を受け入れる共生社会を作るために、私はインクルーシブ教育を実現させたい。障害の有無に関係なく、誰もが強み弱みを持つているということを子どものころから認識する。そして、障害は本人にあるのではなく、社会にあるものと理解し、ともに生きるために周りの環境を変えていく工夫をしていけるようになる。それにより、すべての人たちが社会的自立を目指す共生社会へと変わるのだ。そのインクルーシブ教育を実現させるために、「学校行事」を活用したい。学校行事として、普通学校と特別支援学校の生徒たちがともに学ぶような機会を作る。障がい者の立場になった体験を、学校行事を通して学ぶことにより、徐々に社会モデルの考えに変わり、インクルーシブ教育のための一歩となる。

すべての子どもたちが、幸せに過ごしていけるような未来を目指し、共生社会をつくる一助となつて、夢を実現させたい。